城西病院広報誌
プラタナス
Vol.141
発行：（令和５年７月４日）
城西病院広報文化委員会

令和５（2023）年新年教書
―失地回復を図る年―

理事長・総長　関　健

2023 年が、コロナ禍が終息しないままに明けた。例年だと「新年明けましておめでとうございます。」と挨拶するところであるが、今年は、とてもそのような挨拶はできない。ウクライナ戦争が継続し、世界的な経済恐慌が起きつつあるからだ。2019 年 12 月に中国武漢に始まった Covid-19 感染症は、瞬く間に世界中にパンデミックを引き起こし、第３次世界大戦とまごう被害を世界各地にもたらした。

標記の副題は、失われた領土を取り戻すの謂であるが、業績の回復にも使われる。ロシアのウクライナ侵攻や中国の台湾併合の野望は彼らに言わせれば、失地回復となる。我が国は沖縄を取り戻すことはできたが、北方四島は未だに回復できていない。

本題に移ろう。コロナ禍の３年間に我々の法人の業績は悪化した。受診患者数が減り、病棟のクラスター発生を避けるための入院制限、コロナ対応の医療材料費の増大、等が原因であるが、この１年間は、これらに加えて、物価の高騰による光熱水費や給食材料費の増大が輪をかけた。国からの補助金によって、昨年度は何とか赤字決算を免れたが、コロナ政策が変更される令和５年度は、国からの補助金は期待できず、自力で回復を図らなくてはならない。国の補助金は、コロナ太りともいうべき利益を公立病院にもたらしたといわれている。都道府県の指示でコロナ感染者を受け入れるという名目でコロナ病床を設け、実際には受け入れずに空床確保料を受け取るという、いわば“濡れ手で粟”ということなのである。この辺りは財務省も把握していて、来年の診療報酬改定では医療費を引き上げる環境にはないといっている。

外来診療においても患者数の減少は深刻である。また訪問系の利用者数も減少している。受診の在り方も変化してきた。オンライン診療である。また電話による投薬の依頼も、もともとはコロナ特例だったものが常態化し、あたかも通販で物を買うがごとく注文してくる。出前医療も行われるようになった。訪問診療に特化した診療所が各地にできてきたが、在宅診療としては好ましいことである。一方都会では、こうした診療所を束ねて、管理会社が患者からの診療依頼を受け、近くにいる―車で移動中の訪問診療医―医師に取り次ぎ、診療に向かわせる。薬剤も近くの薬局から出前させる。とこうした仕組みを TV を通じて堂々と広告しているのである。タクシーをアプリで自宅に呼ぶがごとくである。

我々が地域に根差して展開してきた医療や介護サービスが、待つ医療や待つ介護では立ち行かなる時代が到来してきている。かねがね指示してきた在宅医療支援病院の認可を受けることは、失地回復を図る切り札であることを皆肝に銘じてほしい。担当者が意識改革して課題を解決しないと職員皆の首を絞めていることを当事者はどう受け止めているのか、猛省を促す。

経営者の視点で！

病院長　髙　昌星

信州大学から異動し、社会医療法人城西医療財団に奉職して 7 年目に入ります。異動した当初は城西病院に奉職してからは 130 年以上の歴史ある当病院に勤務し、地域医療の一翼を担うという新たな使命感で地域貢献に尽力できるという喜びで満ちておりました。城西病院のモットーである「患者さんに優しく・いつも優しく」は大いに共感でき、それを守ることは全職員の使命であると今も思っています。

しかしながら、現実にはこのモットーが全職員に行きわたらず、時にトラブルが生じることがあります。あらためて全職員にはこの「患者さんに優しく・いつも優しく」のモットーを実践していただきたくお願い致します。

社会医療法人城西医療財団には城西病院、豊科病院、ミサトピア小倉病院、それに神城醫院の 3 病院と 1 医院を擁しております。さらに安曇野メディアと白馬メディアの 2 つの老健施設があります。また社会福祉法人には特養の小倉メナーがあります。それ以外にも両法人には多くの施設が存在します。これらの施設はお互いに強く結びつき協力関係が強固にあるべきだと思っていましたが、実際にはあまり有機的に協力的に機能していないのでないかとういう印象を受けます。平たく言えば、同じ財団施設間で患者さんをフォローできる体制を今後は構築していく必要があるのではないかと思う次第です。

この場を借りて全職員にお願いしたいのは各自が経営者としての視点をもっていただきたいということです。全職員には十分な賞与を出したいという思いは理事長をはじめとして経営陣が強く持っています。ただ賞与を出すにはその財源がなければならないのは自明の理です。病床の稼働率はその中でも最も重要な位置を占めます。

残念ながら令和 4 年度の決算では病床稼働率が最も悪く、多額の赤字決算となりました。小生が勤務して初めてのことです。とても賞与を出せる状況ではありません。それでも経営陣はなんとか賞与を出すべく、ない財源の中から賞与を出すことを決めました。財源がない中で賞与を出すという意味を各自が考えて頂きたいと思います。

今年度は V 字回復あるいはそれ以上の経営安定運営を行なっていただきたいと強く願っています。それには収益を上げ、支出を極力減らす以外には道はありません。医師、看護師、介護士、リハビリテーションスタッフ、事務職員等の全職員があらためて経営者の視点で物を考え、財団職員が一丸となって団結して病床稼働率を上げ、収益をあげ、十分な財源を確保し、賞与アップで全職員に還元していくという正の循環が回るようになお一層のご尽力をお願いしたいと思います。

城西医療財団　理念

私達は、病める人、障碍を持つ人にいつも優しく、
最良の医療サービス及び福祉サービスを一体的に提供する。
また、心身の健康保持・増進を志向する人に最良の保健サービスを提供する。
利用者を身体的、精神的、社会的、そして論理的に診療し、科学的根拠に基づいた治療を行う。

令和５年度　新年度式

令和５年４月４日に８ビル３階会議室で新年度式が行われました。今年は新型コロナウイルスが流行してから行われていなかった、新入職員からの「誓いの言葉」を理学療法部の福岡歩武さんが緊張感漂う中、堂々と発表してくれました。在職職員からは理学療法部の横山大輔さんが新入職員に向けて「歓迎の言葉」を送っていただきました。

令和５年度　バラの日

令和５年６月 13 日に８ビル３階会議室で「バラの日」（永年勤続者表彰）が行われました。今年度も多くの方々が表彰され、表彰状・記念品授与の後、表彰者を代表して 15 年表彰である医療連携室の塩野﨑勇人さんが挨拶を行いました。

《勤続５年表彰》　10 名
《勤続 10 年表彰》　９名
《勤続 15 年表彰》　９名
《勤続 20 年表彰》　５名
《勤続 25 年表彰》　１名

表彰された皆様、
おめでとうございます！